

# ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

と連絡が来たのです。

しかしそれは映画の相談ではなく、医療の相談でした。

「死因は急性骨髄性白血病」と書いてあると、突然病に襲われて亡くなったようなイメージを持たれるかもしれませんが、そんなこ

とはありません。発症するのが急であり、闘病を長く続けている人はたくさんいます。

白血病とは、血液のがんのこと。骨髄芽球といわれる、白血球になる前の未熟な細胞に異常が起こること、骨髄でがん化した細胞が異常に増える病気です。急性骨髄性白血病は、1年間に約4000人が発症します。若い人でも

なりまします。昔は「不治の病」といわれていましたが、今は抗がん剤の進歩によって、5年生存率は4割で、完全寛解する人もいます。

しかし高齢になればなるほど、治療を続けるのがしんどく、治療のメリットと副作用のデメリットを天秤にかけながら医療方針を決めていかねばならない場合もあります。

大森監督は僕に、「白血病治療のやめどき」の相談をしたいと仰いました。僕は以前に、『抗がん剤10の「やめどき」』という本を書いていました。「やめどき」は、医療側ではなく、あくまでもご本人が決めるものとお話ししました。どんなに効果がある薬でも、その人の状態によっては命を縮める可能性もあるからです。

大森監督は熱心に僕の話を聞いてくださり、悩んだ揚げ句「もう少し治療を続ける」と決断されました。抗がん剤の「やめどき」に、正解はありません。ご本人が決めた選択が、ただ一つの「答え」なのです。

この原稿を書いている今日(11月20日)、宝塚映画祭があり大森一樹特集が組まれました。監督も天国からトークショーに参加していることでしょう。

## 282 映画監督 大森一樹



医者の家に生まれて、子供時代は医師を目指しましたが、青春時代、ゴダール監督作品に出合ったことで一念発起。医学部を出た後に映画監督として成功された異例の経歴の持ち主。『ゴジラVSビオランテ』などの平成ゴジラシリーズや、医学生への苦悩を描いた『ヒポクラテスたち』、アイドル全盛期に斉藤由貴さん主演『恋する女たち』や吉川晃司さん主演『すかんぴんウオーク』など上質な青春映画をヒットさせたことでも知られる大森一樹さんが、11月12日に兵庫県内の病院で亡くなりました。享年70。死因は、急性骨髄性白血病との発表です。

# 白血病との闘い「やめどき」で相談

実はこの夏、大森監督と何度か会う機会がありました。僕が原作を手掛け、高橋伴明監督がメガホンを取られた映画『痛くない死に方』を観てくださったとのこと

で、高橋監督を通じて、会いたい